

びこみました。

満開坊は、里人たちにお礼の言葉をのべて入棺し、釘打ちと土うめをたのみましたので、人々は、附近の石を拾い集めて蓋よたを釘うちしたうえで土を覆よたいました。

土の中から、六地藏の竹を通して満開坊の誦うたさむお経の声と鈴の音がきこえてきました。里の人達は、朝晩大桑の根方に来ては香花を手向け水をあげました。そして土の中からきこえてくるお経の声と鈴の音に合掌しました。満開坊が生きたまゝ土の中に入ってから二十一日たって、里人は、満開坊のお経も、鈴の音もきくことができなくなりました。

里の人々は、桑の根元にささやかな塚ふかを築いて、満開坊の霊たまを吊よむいました。そしてこの土地を満開と呼ぶようになりました。

〈第六話〉

助宗明神物語

助宗の家は、根本、志賀、猪狩家と共に岩城氏四殿の重臣であり比佐ひさ館主かんとしとして、代々久の浜